

話題 5 1

長寿社会の「見取り図」 ～より良く生きるために～

告別式での喪主の挨拶でした。「故人は、脳卒中で倒れて以来、17年間の入院・入所生活でした」と。コミュニケーションは取れず、胃瘻での食事であったとのこと。

「看取り」。人生の終末期のケアを意味するが、日本人の国民性を如実に表現している用語である。個人主義の発達した欧米においては、あくまでも看取られる側が主人公である。人生の終末期を尊厳をもって、その人らしく「見送る」過程である。

日本における「看取り」という表現は、家族の納得のいく形での終末期の場面が想定され、家族の満足度の高い「看取り」が求められる。「終わり良ければすべて良し」の印象が強い。主人公はさておいて。

高齢化社会を迎えて、老健施設においても「看取り」の場面が多くなった。施設における「看取り」は、認知障害の合併率が高く、本人の意思よりも、取り巻きの家族の思いが前面に現れる。

高齢者の最期の場面は多彩であり、タイプ分けを試みた。多くは、「老衰型」である。全く苦痛を伴うことなく、穏やかな最期である。わずかの食事と脱水をやわらげる点滴で、6か月から1年の経過で天に帰る。理想的な自然の経過であり、段階を追った病状説明により、家族にとっても納得のいく形で受け止められる。

「有症状型」は、軽い喘鳴や痙攣などの症状を呈することがあり、悪性腫瘍と慢性疾患の急な悪化の事例にみられる。悪性腫瘍においては、家族もそれなりの覚悟があり、病態を受け入れる。慢性疾患の急性増悪においては家族の不安感が増す。

重篤な状態から一時的に脱し、安定した状態に移行する「回復型」に出会うことがある。臨終の間近なことを告げた後に、病状は回復して6ヶ月以上にわたり安定した状態に戻る事例である。最終的には、「老衰型」や「有症状型」の経過となる。

希に、「突然死型」があり予測不能な場面があり、心肺停止の状態で見られることがある。

「有症状型」「回復型」「突然死型」においては、それぞれに対応したきめ細かな経過の説明と心の準備を促すことが求められる。

「見取り図」は、看取る側と家族の側の両者の構図の一致が理想である。基本的には、主人公の生前の意思が最優先されるべきである。日本においては、殊に沖縄においては、主人公の意思が明らかでない事が多いために混乱の要因になっている。

「一日でも長く生きて欲しい」との家族の願いは大切にすべき心情ではあるが、「自分と自分」、「自分と他者」との両者のコミュニケーションが完全に絶たれた状態での延命処置には多くの課題が残る。

「見取り図」はすべての人に描かれる風景であり、元気な時に、家族と共にその下書きをしたためておくことが大切な事だと思われる。「時」を、「今」を大切に、より良く生きるために、自らの「見取り図」の構想を練っておきたい。「寿命」は、確実に存在する。

「沖縄・生と死と老いを見つめる会」世話人



石川 清司

「看取り」。人生の終末期のケアを意味するが、日本人の国民性を如実に表現している用語である。個人主義の発達した欧米においては、あくまでも看取られる側が主人公である。人生の終末期を尊厳をもって、その人らしく「見送る」過程である。日本における「看取り」という表現は、家族の納得のいく形で

の終末期の場面が想定され、家族の満足度の高い看取りが求められる。「終わり良ければすべてよし」の印象が強い。主人公はさておいて、
高齢化社会を迎えて、老健施設においても看取りの場面が多くなった。施設における看取りは、認知障害の合併率が高く、本人の意思よりも、取り巻きの

家族の思いが前面に現れる。高齢者の最期の場面は多彩であり、タイプ分けを試みた。多くは、「老衰型」である。全く苦痛を伴うことなく、穏やかな最期である。わずかの食事と脱水をやわらげる点滴で、6カ月から1年の経過で天に帰る。理想的な自然の経過であり、段階を追った病状説明により、家族に

重篤な状態から一時的に脱し、安定した状態に移行する「回復型」に出会うことがある。臨終の間近なことを告げた後に、病状は回復して6カ月以上により安定した状態に戻る事例である。最終的には、「老衰型」や「有症状型」の経過となる。まれに、「突然死型」があり予

大切な最期構想練って

家族と「見取り図」製作を

とつても納得のいく形で受け止められる。

「有症状型」は、軽い喘鳴やけいれんなどの症状を呈するこ
とがあり、悪性腫瘍と慢性疾患の急な悪化の事例にみられる。悪性腫瘍においては、家族もそれなりの覚悟があり、病態を受け入れる。慢性疾患の急性増悪においては家族の不安感が増

測不能な場面があり、心肺停止の状態で見送れることがある。「有症状型」「回復型」「突然死型」においては、それぞれに対応したきめ細かな経過の説明と心の準備を促すことが求められる。
「見取り図」は、看取る側と家族の側の両者の構図の一致が理想である。基本的には、主人

公の生前の意思が最優先されるべきである。日本においては、殊に沖縄においては、主人公の意思が明らかでないことが多いために混乱の要因になっている。「一日でも長く生きてほしい」との家族の願いは大切にすべき心情ではあるが、「自分と自分」「自分と他者」との両者のコミュニケーションが完全に絶たれた状態での延命処置には多くの課題が残る。見取り図はすべての人に描かれる風景であり、元気な時に、家族と共にその下書きをしたためておくことが大切なことだと思われる。「時」を、「今」を大切に、より良く生きるために、自らの「見取り図」の構想を練っておきたい。「寿命」は、確実に存在する。
(名護市、「沖縄・生と死と老いを見つめる会」世話人、介護老人保健施設「あけみおの里」施設長、68歳)